豊川高等学校

令和八年度　一般入学者選抜試験問題

国語

試験時間　四十分

「解答はじめ」の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

【注意事項】

一　この試験は、すべてマークシート方式です。

二　問題冊子の中に、解答用紙があります。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れなどに気付いた場合は、手をあげて監督者に知らせなさい。

三　マークシート記入上の注意

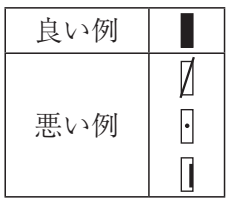
・マークはＨＢの黒鉛筆で、（例１）の良い例のように枠の中をぬりつぶしなさい。

・受験番号は、（例２）に従って記入し、それぞれの番号をマークしなさい。

・解答の記入方法は、たとえば ア と表示のある問いに対し 2 と解答する場合には、（例３）のように ア のマーク解答欄にマークしなさい。

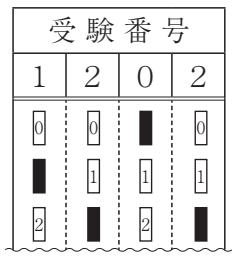
・訂正するときは、消しゴムできれいに消し、マークシート上に消しくずを残してはいけません。

（例１）マークの仕方

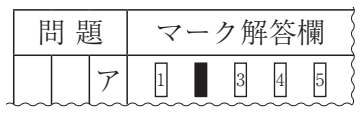


←

（例２）受験番号　１２０２の場合



（例３）解答の記入方法



四　「解答やめ」の指示で記入をやめ、筆記用具を机上に置きなさい。

五　「解答用紙」だけを監督者が回収します。指示があるまで着席していなさい。

問六　次の①から⑤までの中から本文の内容と合致するものを一つ選んで、ム にマークしなさい。

① 浮世房は、蛙たちが人ではなく、ましてや鳥獣でもないので、観音様に正しく願いが伝わらず、うまくいかなかったのだろうと考えた。

② 観音様は蛙たちが真剣に祈る姿に心を打たれたためその願いをかなえてやったが、蛙たちは思ったのと違う結果になったため文句を言った。

③ 蛙たちが自分たちの願いの愚かさに気づいて改めて元に戻してほしいと祈ったため、観音様はその願いにこたえて元通りにしてやった。

④ 人間が自分の主人を恨んだり世間が自分を認めてくれないと不満をもったりするのは、自分の力量をわきまえていないからである。

⑤ 下級武士は自らの能力を発揮するために新たな仕事を見つけようとしたができず、さらに元の勤めに戻ることもできなかった。

1　次の文章を読んで、後の問一から問十二にそれぞれ答えなさい。

考えてみれば当たり前のことですが、人間以外のすべての動植物は、自分を取り巻く環境に、自分の体を直接曝(さら)して生きています。（　a　）もし環境が変われば、その新しい環境に適応できるようにと、いま持っている体の形状や性質自体を変化変容させなければ、生き延びることができないのです。ところがもしそれに成功した場合には、元の種とは様々な点で①異なった別種の生物になってしまうのです。

たとえば日本ではごく普通の草でしかない菊の類(Ⅰ)は、アフリカの最高峰で②あるキリマンジャロの麓の乾燥地帯では、ちょっと見ると巨大な柱サボテンかなと思うほど、茎が一面棘(とげ)に覆われた、まさに(b)砂漠で③みるサボテンの仲間のような形をしているのです。花を詳しく(c)見なければ、これが日本の菊の仲間だとは誰も思いません。

この菊は太古の昔に、日本の菊と同じ先祖から分(わか)れたものが、この地の過酷な風土条件に適応して、水分の蒸散を少なくするため皮をサボテンのように厚く硬く変化させ、動物に食われないようにと葉の変形した棘を一面に生やし、（　d　）根は少ない水分を求めて、地下深く何メートルにもわたって広がっているのです。

つまり自由には動けない植物が、環境の変化に順応して生き延びてゆくためには、自分の体の形や性質そのものを変えることが必要なのです。そしてこのように新たな環境に適応することに成功した時には、元の仲間とは性質や姿かたちの全く違う別の種に分化してしまうのです。一

このことは動物の場合でも起こっています。元来は一種だった南米大陸のあるフィンチ（小鳥の一種）が、大昔大陸から遥(はる)か彼方(かなた)に位置するガラパゴス諸島に偶然漂着したとき、硬い木の実の多い島にたどり着いたフィンチは、それを噛(か)み砕くための太くて硬い嘴(くちばし)を徐々に発達させ、反対に柔らかい果実や虫などが(e)豊富な島に住み着いたものの嘴は、それを食べるに適した細身の嘴となっています。また樹皮の下や細い割れ目などに潜む虫などを掘り出して食べるようになったフィンチは、細くて長い嘴をもつように変化しているのです。このようにして元は一種だったものが、今では十四種もの、それぞれ独特の形態変化を遂げたダーウィンフィンチ類に分化してしまっているのです。

このように④一般の生物は、もし性質の異なる様々な環境に分布が広がった場合には、生き延びるために行く先々で出会う新しい環境に順応して、それぞれが自らの体や性質を変化変形させてしまう結果、元々の種の同一性（specific identity）が(f)失われ、互いに別の生物種に分化してしまうのです。

（　g　）我々人間は、現在南極大陸を除くすべての大陸の、(h)あらゆる異なった環境条件の下で⑤生活しています。極寒の北極圏にも人間は住んでいますし、灼熱(しゃくねつ)の砂漠という極度の乾燥地帯や、それ

とは反対の極めて雨量の多い雲霧林にも人類は分布しています。また周りを海で囲まれた絶海の孤島に住み着いている人々もいるのです。それなのに(Ⅲ)一体どうして人間という生物だけは、このように極端に異なる環境の下に広がっても、どこでも同じ人間としてあまり変化せずに生きていくことが出来るのでしょうか。もしかしたら人間という生物は体のどこかに、他の生物には見られない、体や性質が変化変容することを妨げる、何か(i)独特な平衡維持（ホメオスタシス）を司る器官でも持っているのでしょうか。二

そうではありません。私の考えでは、人間だけが他の生物とは違って、自分の体を環境に直接曝していないから、が答えです。人間は他の全ての生物のようには、環境に密着して生きていないからなのです。

以上のことを簡単にまとめると、一般の生物は環境との関係が直接であるために、常に自分を取り巻く環境の変化に巧く適合するようにと、自分の体や性質を少しずつ変化変形させて生きているのだということになります。ところが人間という生物だけは、他の生物のように自分の体や性質を環境の変化に応じて変化させることをせずに、環境と自分との間に『文化』という名の言わば中間地帯を介(j)在させ、この中間地帯を自然環境の変化に応じて変化変形させる、つまり自然環境の変化をそれに吸収させることで、自分自身は環境の変化を直接には受けずに生き延びていく生物なのです。三

その代わり人間を取り巻くこの文化という中間地帯の形状や性質は、住む地域の様々な条件に応じて変化変貌しなければならないために、結果として世界には、多種多様な相互に異なる『文化』が必然的に存在することになるのです。

ここで私が用いたこの(Ⅳ)中間地帯という概念は、ドイツの言語学者レオ・ワイスゲルバー（Leo Weisgerber、一八九九～一九八五）がかつて用いた中間世界〈Zwischenwelt〉という概念からヒントを得て私が考え出した新しいものです。『文化』を「世界」ではなく地帯（zone）と考えることにより、国際関係で用いられる緩衝地帯（buffer zone）や緩衝国（état tampon）などの場合のように、利害を異にする二つの国が直接接触することによって生まれる、衝突や軋轢を回避する仕組みに見立てる見方が、『文化』の意味をさらによく説明できると考えたからです。四

この中間地帯としての文化とは、文化人類学において、〈広義の文化〉と言われるものとほぼ同じです。そこにはどんなものが含まれるのかを具体的にあげますと、第一は食物を加工し食べやすくするための『道具』『火』の使用、そして寒さを防ぐための『衣服』、さらには雨露を防ぐための何らかの構造物、つまり『家』などです。

石や金属の刃物があれば、動物のように、獲物に直接噛み付いて肉や骨を噛み砕くための丈夫な牙や歯を持つ必要はありませんし、何らかの動物を殺して、その皮で体を覆うことができれば、一般の

問三　傍線部（d）・（g）とある。それらの具体的な内容として最も適切なものを後の①から④までの中からそれぞれ一つずつ選んで、へ・ホにマークしなさい。

（d）所願　　［解答記入欄 へ］

① 水の中でうまく泳げるようになること。
② 行きたいところへ行けるようになること。
③ ぴょんぴょんと素早く跳べるようになること。
④ 人間のように立って歩けるようになること。

（g）かくのごとし　　［解答記入欄 ホ］

① 物事のよい点を無視して不満ばかり口にするようになるということ。
② 自分の欠点を取りつくろおうとして長所も失ってしまうということ。
③ 自分の身のほどをわきまえずに行動することで失敗するということ。
④ 無い物ねだりばかりをして他人から相手にされなくなるということ。

問四　傍線部（f）「何の用にも立たず」とある。その理由として最も適切なものを次の①から④までの中から一つ選んで、マにマークしなさい。

① みんなで池のほとりで一緒に歩き出したら次々と転んでしまったから。
② 立つと目が後ろになってしまって前が見えず、危なくて進めないから。
③ 蛙の足はもともと跳ぶようになっており、歩くようになっていないから。
④ 立つと目が後ろになってしまうため、思っていたほど早く進めないから。

問五　傍線部（j）「無理に隙をもぎとり」とある。その理由として最も適切なものを次の①から④までの中から一つ選んで、ミにマークしなさい。

① 今の仕事に不満をもち、もっと能力を発揮できる仕事をしたいと思ったから。
② 自分の能力の限界を感じたことで、仕事に向ける意欲を失ってしまったから。
③ 今の仕事が忙しすぎるので、もっとのんびりできる仕事がいいと思ったから。
④ 今の待遇に不満をもち、他家に仕えればもっと出世できるはずだと思ったから。

問一　傍線部（a）・（i）の口語訳として最も適切なものを後の①から④までの中からそれぞれ一つずつ選んで、ハ・ヒにマークしなさい。

（a）人ほどうらやましきものはなし

［解答記入欄ハ］

① 人間ほどうらやましいものはない
② 人間ほど他人をうらやむものはない
③ 人間ほどうらやましくないものはない
④ 人間ほど他人にうらやまれるものはない

（i）目のつき所のあしければ

［解答記入欄ヒ］

① 目をつけたところが間違っていたのだから
② 目のつき方が異なっているからといって
③ 目のついている場所が悪いのだから
④ 目のついている場所が気に入らないからといって

問二　傍線部（b）・（c）・（e）・（h）・（k）の主語の組み合わせとして最も適切なものを次の①から⑤までの中から一つ選んで、フにマークしなさい。

	b	c	e	h	k
①	人	観音	蝦	世間の人	浮世房
②	蝦	蝦	人	蝦	浮世房
③	蝦	観音	蝦	浮世房	悴侍たる人
④	人	人	観音	世間の人	浮世房
⑤	蝦	観音	蝦	蝦	悴侍たる人

動物がするように長い毛を体に生やすことで、寒さを防がなくともよくなります。さらに言語（V）を使うことなども、人間を他の生物とは異なった特殊な生物にしている重要な文化の要素です。五

なかでも言語は道具や衣服と違って、触ったり目に見えたりするものではありませんが、環境からの刺激や情報を人間が感知した結果を処理し、そのことを仲間に伝えることで、肉体的には強靭（きょうじん）さを欠く人間が、集団的に協力して様々な環境にうまく対処することに役立っています。この文化にはさらに各民族集団に特有の風俗習慣、儀礼や宗教など様々なものが含まれますが、これらが生物としての人間を言わばすっぽりと包んで覆い、自然環境との間にあって環境の直接の影響から人間を守っていると考えるのです。（　k　）言語や風俗習慣、そして宗教までが、住む場所の環境によって違わざるを得ないのです。

この文化という中間地帯（あるいは領域 domain と言ってもよいと思いますが）は視点を変えると、人間と自然環境との間に介在して、環境の影響を人間が直接まともに受けないようにするための、言わば外界からの衝撃を緩衝したり吸収したりする一種の装置（ショック・アブソーバー）の役目を果たしていると考えることができます。そしてこの装置のおかげで、全生物の中で人間という生物一種だけが、自分自身の体の性質や形をそれほど変えずに、地球上のあらゆる異なった自然環境、たとえばすべてが凍（い）てつく極北の地から炎熱酷暑の熱帯まで、さらには極度に乾燥した草木のほとんどない砂漠地帯から、すべてが正反対の熱帯雨林にまで分布を広げながら、それでも種としての同一性を失うほどの性質や形状の変化を示さずに済んでいるのです。

先に述べたように、人間以外の一般の生物は、環境が変化すればそれに適応するために、自分の体を新しい環境に合わせて変えることで、生き残りを図ります。〈水は方円の器に従う〉と言われるように、水は注ぎ入れられた容器の形を素早く自分の形としますが、これと同じように一般の生物はまさに新しい環境に出会うと、それにピタッと合うように自分の体や性質を変えることで、生き残りを図るのです。これに対し人間だけは自分を変えずに、〈自分を取り巻く文化〉を新しい環境に合うように変化させることで対応します。その結果として地球上の様々な異なる環境の下に、人間は自分自身の体や性質をあまり変えることなく、結果としてどこでも同じ人間として生き残ってきたのです。

（鈴木孝夫『日本の感性が世界を変える　言語生態学的文明論』新潮社による）

問一　空欄（a）・（d）・（g）・（k）に入る言葉の正しい組み合わせを次の①から⑤までの中から一つ選んで、ア にマークしなさい。

① a　ですから　d　さらに　g　ところで　k　しかし
② a　そして　d　しかも　g　ところが　k　つまり
③ a　すると　d　そして　g　ただし　k　しかし
④ a　そのため　d　しかも　g　ところで　k　したがって
⑤ a　ただし　d　そして　g　ところが　k　したがって

問二　傍線部（b）「まさに」・（c）「詳しく」・（f）「失われ」・（h）「あらゆる」・（i）「独特な」の品詞の正しい組み合わせを次の①から⑤までの中から一つ選んで、イ にマークしなさい。

① b　連体詞　c　副詞　f　動詞　h　連体詞　i　形容動詞
② b　副詞　c　形容詞　f　動詞＋助動詞　h　連体詞　i　形容動詞
③ b　副詞　c　副詞　f　動詞＋助動詞　h　副詞　i　形容動詞
④ b　連体詞　c　副詞　f　動詞＋助動詞　h　連体詞　i　名詞＋助詞
⑤ b　副詞　c　形容詞　f　動詞　h　副詞　i　名詞＋助詞

問三　傍線部①から⑤の「で」について、次の1・2に答えなさい。

1　本文中の傍線部①から⑤の「で」の中で一つだけ用法が異なるものを選んで、ウ にマークしなさい。

2　1で選んだ「で」と同じ用法のものを、次の選択肢の①から⑤までの中から一つ選んで、エ にマークしなさい。

① まだ開場時間ではない。
② かぜで学校を欠席する。
③ ニュースで事故を知った。
④ 先に料理を頼んでおく。
⑤ 早朝の風はさわやかである。

3　次の古文を読んで、後の問一から問六にそれぞれ答えなさい。

今はむかし、池のほとりに蝦のあまた集まりていふやう、「あはれ生きとし生けるものの中に、人ほどうらやましきものはなし。（a）われら、いかなればかかる生をうけて、手足をばそなへながら、水を泳ぐを能として、陸にあがりてはつくばひ居り、行く時も心のままに走り行くことかなはず、ただ冨々と跳ぶばかりにて早為もならず。いかにもして人のごとく立ちて行くならば良かるべし。いざや観音に願をかけて、立つことをいのらん」とて、観音堂にまいりて、「願はくはわれらをあはれみ給ひ、（b）せめて蝦の身なりとも、人のごとくに立ちて行くやうに守らせ給へ」といのりける。（d）まことの心ざしをあはれとおぼしめしけん、（c）そのまま後の足にて立ちあがりけり。「所願成就したり」と、（e）よろこびて池に帰り、「さらばつれだちて歩きて見ん」とて、陸に立ちならび、後足にて立ちて行けば、目が後になりて一足も向へ行かれず。先も見えねば危さ言ふばかりなし。「これにては何の用にも立たず。（f）ただ元のごとく這はせて給はれ」と祈りなをし侍りといへり。

浮世房聞きて、「世間の人これらのたぐひに似たる事多し。とかく身のほどを知らざる故に、君を（g）恨み世をかこつ者みなかくのごとし。蝦は、をのれ鳥獣にだにもあらず、虫のたぐひにして、人を（h）うらやみ、立ちて行かんとすれども、生まれつき人に似ず、目のつき所のあしければ、（i）立ちて行くべきものにあらずと、身のほどを知らざる故なり。悴侍たる人も、『これほど奉公すれども知行の加増もなく、物頭にもなされず、面白げもない』と述懐して、余の家中へ行きたらば立身せいでは、など思ひて、（j）無理に隙をもぎとり、余所をかせげども、ありつきかねて迷惑する時は、（k）ただ元の家がましぢやものをと、くやむ事、千度百度なれども甲斐なし。」

（『浮世物語』による）

（注）
○ 蝦　＝ 蛙。
○ つくばひ居り　＝ はいつくばっていて。
○ 冨々と　＝ ぴょんぴょんと。
○ 向へ　＝ 前の方へ。
○ 浮世房　＝ 『浮世物語』の主人公。
○ かこつ　＝ ぐちをこぼす。
○ 悴侍たる人　＝ 雑用をする下級武士。
○ 物頭　＝ 部隊をとりまとめる役職。
○ ましぢやものを　＝ ましだったなあ。
○ 千度百度　＝ 何度も何度もという意味の慣用表現。

問三　次の1から5の作者の作品の組み合わせとして正しいものを後の①から⑤までの中から一つ選んで、ノにマークしなさい。

1　樋口一葉　　2　島崎藤村　　3　森鷗外　　4　芥川龍之介　　5　幸田文

①　1　十三夜　　2　五重塔　　3　明暗　　4　河童　　5　父―その死
②　1　たけくらべ　　2　浮雲　　3　高瀬舟　　4　人間失格　　5　細雪
③　1　みだれ髪　　2　破戒　　3　阿部一族　　4　トロッコ　　5　流れる
④　1　にごりえ　　2　夜明け前　　3　舞姫　　4　羅生門　　5　おとうと
⑤　1　風立ちぬ　　2　若菜集　　3　山椒大夫　　4　蜘蛛の糸　　5　野菊の墓

問四　傍線部（e）・（j）の対義語として最も適切なものを後の①から⑤までの中からそれぞれ一つずつ選んで、オ・カにマークしなさい。

（e）豊富　　［解答記入欄 オ］

①　貧富
②　不便
③　困窮
④　過多
⑤　欠乏

（j）吸収　　［解答記入欄 カ］

①　除外
②　開放
③　支出
④　放出
⑤　保持

問五　傍線部（I）「菊の類」はどのようなことの例として挙げられているか。最も適切なものを次の①から⑤までの中から一つ選んで、キにマークしなさい。

①　動植物は自分を取り巻く環境に自分の体を直接曝して生きているため、環境が変わると適応できなくなることの例。
②　新しい環境に適応するために自分の体の形状や性質を変化させても、本質的な部分では元の種と変わらないことの例。
③　植物が新しい環境に適応するために自分の体の形状や性質を変化させた結果、元の種とは別の種に分化したことの例。
④　動物と異なり自由に動けない植物は、環境への適応が不可欠なため、動物よりも体の形状や性質の変化が大きいことの例。
⑤　生息している場所により見た目や性質が全く異なっていても、よく調べると仲間であるとわかるものがあることの例。

問六　傍線部（Ⅱ）「それ」が指す内容として最も適切なものを次の①から⑤までの中から一つ選んで、ク にマークしなさい。

① 硬い木の実など。
② 樹皮の下や細い割れ目などに潜む虫など。
③ サボテンの仲間。
④ ガラパゴス諸島にある食べ物。
⑤ 柔らかい果実や虫など。

問七　傍線部（Ⅲ）「一体どうして人間という生物だけは、このように極端に異なる環境の下に広がっても、どこでも同じ人間としてあまり変化せずに生きていくことが出来るのでしょうか」とある。その理由として最も適切なものを次の①から⑤までの中から一つ選んで、ケ にマークしなさい。

① 人間という生物は、他の生物とは異なり、体のなかに体や性質が変化変容することを妨げる、平衡維持を司る器官があるから。
② 人間は他の生物のように自分の体を環境に直接曝していないため、環境の変化を直接受けずに生き延びることができるから。
③ 人間の体はあらかじめどのような環境にも対応できるようになっており、環境の変化に合わせて体や性質を変える必要がないから。
④ 人間は『文化』を発達させることで環境とは無関係に生きていけるようになっているため、環境の変化には影響されないから。
⑤ 地球上では極端に環境が異なるにしても、人間が生きるには必要最低限の環境が整っており、体や性質を変化させなくてもよいから。

5　赤ちゃんをダいてあやす。

［解答記入欄 テ］

① 将来のホウフを語り合う。
② 梅のホウコウが辺りに漂う。
③ キノコのホウシが飛ぶ。
④ 彼女はホウガン投げの選手だ。
⑤ 人口がホウワ状態になる。

問二　次の1から5の傍線部を漢字と送り仮名に正しく改めたものを後の①から④までの中からそれぞれ一つずつ選んで、ト から ネ にマークしなさい。

1　約束を破ったことをアヤマル。

［解答記入欄 ト］

① 誤まる　② 誤る　③ 謝まる　④ 謝る

2　節約のため、光熱費をオサエル。

［解答記入欄 ナ］

① 抑さえる　② 抑える　③ 押さえる　④ 押える

3　ゆるんでいたネジをシメル。

［解答記入欄 ニ］

① 締める　② 締る　③ 絞める　④ 絞る

4　幼いころをカエリミル。

［解答記入欄 ヌ］

① 顧えりみる　② 顧りみる　③ 顧みる　④ 顧る

5　乱暴者をコラシメル。

［解答記入欄 ネ］

① 懲らしめる　② 懲しめる　③ 懲める　④ 懲る

2

次の問一から問三にそれぞれ答えなさい。

問一　次の1から5の傍線部と同じ漢字が用いられているものを後の①から⑤までの中からそれぞれ一つずつ選んで、ソからテにマークしなさい。

1　スルドい目つきで辺りを見回す。

［解答記入欄ソ］

① エイエンの愛を誓い合う。
② 監督としてエイガを制作する。
③ 店のエイギョウ時間を調べる。
④ 彼は物理学のシュンエイだ。
⑤ 少数セイエイのチームを率いる。

2　その道は緩やかにケイシャしている。

［解答記入欄タ］

① 子どもが神社のケイダイで遊ぶ。
② 平安時代の文学にケイトウする。
③ バスのケイトウを調べる。
④ 海外の会社とテイケイする。
⑤ ハンケイ五センチメートルの円を描く。

3　経済セイサクを発表する。

［解答記入欄チ］

① 最後にサクインを付ける。
② 経費をサクゲンする。
③ サクサンの性質を調べる。
④ サクリャクをめぐらす。
⑤ サクバンは満月だった。

4　商品をチンレツする。

［解答記入欄ツ］

① 暴動をチンアツする。
② 電車のウンチンを調べる。
③ チンプな冗談では笑えない。
④ チンツウな表情を浮かべる。
⑤ チンミョウな仕草で周りを笑わせる。

問八　傍線部（Ⅳ）「中間地帯」とある。その説明として最も適切なものを次の①から⑤までの中から一つ選んで、コにマークしなさい。

① 人間が、自然環境の変化に応じて自分の体や性質を変化させる代わりに自然と都市との間に設けた、変化変形させるための郊外の土地。
② 人間が環境の変化に巧く適合して少しずつ自分の体や性質を変化変形させるために設けた、変化の衝撃をいったん受け止める役割を果たすもの。
③ 人間が種として変化しないで済むように自然と人間との間に設けたもので、自然環境の変化の影響を受けない、人間の本質を守るもの。
④ 人間と自然環境との間で人間が直接環境の影響を受けないようにするために、変化の衝撃をやわらげたり吸収したりする役割を果たすもの。
⑤ 人間が種としての性質を変えずに生きると同時に、人間が自然環境に与える影響をやわらげるために、両者の間の緩衝をはかるもの。

問九　傍線部（Ⅴ）「言語」とある。その説明として最も適切なものを次の①から⑤までの中から一つ選んで、サにマークしなさい。

① 人間の集団において環境に左右されずに発生する普遍的能力の一つで、文化による差異が大きいもの。
② 非物質的な要素で、環境からの刺激や情報を仲間と共有し、集団的協力体制をとるために有益なもの。
③ 視覚や触覚を超えた抽象的手段として、環境からの刺激を受けて感知した芸術的イメージを伝えるもの。
④ 道具や衣服と異なり触れたり目に見えたりしないため、環境からの刺激にはあまり影響されないもの。
⑤ 他の文化的要素と異なり発達した文明において現れるもので、人間の本質的な生存には影響しないもの。

問十　次の部分は本文中の一から五のどこに入るか。後の①から⑤までの中から一つ選んで、シにマークしなさい。

だから人間は甚だしく異なった環境に分かれて住むようになっても、体や性質はそれほど変化せずに済んでいるのです。

①　一　②　二　③　三　④　四　⑤　五

問十一　次の①から⑤までの中から本文の内容と合致するものを一つ選んで、スにマークしなさい。

① 植物と異なり自由に動くことができる動物は、種としての性質を変えなくても適応できるような環境を求めて動けばよく、植物ほど分化することはない。

② 動物であるフィンチは本来餌に合わせて体を変える必要はなかったが、漂着先に定着したほうが生存に有利だと判断したため体を変えたと考えられる。

③ 一般の生物の場合、新しい環境に適応できる性質を持った種が生き延びたのであり、生き延びるために種としての性質を変えたわけではない。

④ 生物が生き延びるためには周りの環境に合わせて変化することが必要であり、人間が多種多様な文化を持つのはもっともなこととといえる。

⑤ 人間がこれからの環境の変化に適応するためには、中間地帯があったとしても自らの種としての性質を変えることは避けられない。

問十二　次の文章は、本文を読んだ生徒達の会話である。空欄（1）・（2）に入る言葉の正しい組み合わせを、後の①から⑤までの中から一つ選んで、セにマークしなさい。

生徒A　多くの生物は、環境が変わると自分の形を変えないと生きられないのですね。

生徒B　はい。アフリカの乾燥地帯にあるサボテンの仲間のような形の植物が、日本の菊の仲間だというのは驚きました。

生徒C　全然違いますよね。一方、人間について述べられた箇所では、他の生物と異なる人間の環境への適応の仕方が説明されていました。

生徒A　環境に適応するためには何かを変える必要があるわけですが、何を変えるかが他の生物と人間とでは異なるのですね。

生徒B　人間の場合、生活する環境によって、言葉や常識などが異なりますね。

生徒A　はい。それが（　1　）ということですね。

生徒B　ただ最近は、世界中に似たような文化が広がっているような気がします。

生徒C　グローバル化ですね。これが進むと「中間地帯」としての「文化」も似たような形になっていく恐れがありそうです。

生徒A　そうなると、（　2　）かもしれないですね。

生徒B　あと、温暖化のような世界規模の問題に、「文化」だけで対応できるのか不安です。

生徒C　人間が環境に適応することについて、改めて考える必要がありますね。

① （1）環境の変化の影響を文化が受ける
（2）人間も体の形を変える必要が生じる

② （1）環境の変化に応じて文化を変える
（2）人間が住める環境がなくなる

③ （1）人間同士の間に分断を生む
（2）世界の多様化が進む

④ （1）環境に合わせて文化が多様化する
（2）環境との衝突をうまく処理できなくなる

⑤ （1）人間の多様性を楽しむ
（2）人間が均質的になり共通理解が進む